

モーツァルト室内管弦楽団 第161回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 161. Regulärkonzert

〈モーツァルトとハイドン〉その8

2014年12月20日(土)午後2時■いずみホール

Sonnabend, 20. Dezember, 2014 14Uhr Izumi Hall Osaka

■主催:モーツァルト室内管弦楽団 <http://moz-kam.org>

■協賛:いずみホール[一般財団法人 住友生命福祉文化財団]

■マネジメント:大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504

*ロビーでは大阪ユニセフ協会を通じて、世界の子どもたちのための募金活動を行っています。



Program

モーツァルト室内管弦楽団 第161回定期演奏会
Mozart-Kammerorchester / 161. Regulärkonzert

2014年12月20日(土)午後2時 いずみホール
Sonnabend, 20. Dezember, 2014 14Uhr Izumi Hall Osaka

〈モーツァルトとハイドン〉その8

モーツァルト 歌劇《救われたベトゥーリア》序曲
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791) Ouverture zur Oper „Betulia liberata“ KV118
Allegro — Andante — Presto

モーツァルト ピアノ協奏曲 第20番 ニ短調 K.466*
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791) Klavier-Konzert Nr.20 d-moll KV466*
I. Allegro
II. Romanze
III. Allegro assai

* * *

モーツァルト オッフエルトリウム《ミゼリコルディアス・ドミニ》***
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791) Offertorium „Misericordias Domini“ d-moll KV222***
(「主のお恵みを」) ニ短調 K.222***

モーツァルト キリエ ニ短調 K.341***
Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791) Kyrie d-moll KV341***

ハイドン 不安の時代のミサ ニ短調 Hob.XXII-11 《ネルソン・ミサ》**、***
Joseph Haydn(1732-1809) Missa in Angustiis d-moll Hob.XXII-11 „Nelsonmesse“**、***
I. Kyrie: Allegro moderato
II. Gloria
1. Gloria: Allegro
2. Qui tollis: Adagio
3. Quoniam: Allegro
III. Credo
1. Credo: Allegro con spirito
2. Et incarnatus: Largo
3. Et resurrexit: Vivace
IV. Sanctus: Adagio - Allegro
V. Benedictus: Allegretto
VI. Agnus Dei
1. Agnus Dei: Adagio
2. Dona: Vivace

ピアノ:岡田 佳子*/Klavier:Yoshiko Okada*
ソプラノ:木村能里子/Sopran:Noriko Kimura**
アルト:山田 愛子/Alt:Aiko Yamada**
テノール:西垣 俊朗/Tenor:Toshiro Nishigaki**
バス:萩原 寛明/Bass:Hiroaki Hagihara**
合唱:モーツァルト記念合唱団***/Chor:Mozart Choral Ensemble ***
(合唱指揮:益子 務)/(Chor-Dirigent:Tsutomu Masuko)
コンサートマスター:釋 伸司/Konzertmeister:Shinji Shaku
指揮:門 良一/Dirigent:Ryoichi Kado

ハイドンとモーツァルト

門 良一

ハイドンとモーツァルト、二人ははなはだ違った人物であった。「これくらい何もかも正反対な二人の人間を見出すことはむずかしい。」*と言われる。

ハイドンは穏やかな性格で、規則正しい生活を送り、楽団員や歌手たちの面倒をよく見、商売も上手であった。ハンガリーの田舎貴族に30年近く仕え、ウィーンに出ることが大事件になるような変化に乏しい生き方をした。それでいてヨーロッパ中に令名は知れ渡っており、遠くからも作曲の依頼や楽長就任の招請が絶えなかった。60歳近くになってからロンドン旅行を成功させ、大金を手にした。77歳の天寿を全うし、栄光に包まれた晩年を送った。

一方のモーツァルトは躁鬱型性格であり、気分が目まぐるしく変わる人であった。毒舌家で他の作曲家や演奏家を容赦なく批判した。金銭感覚にとぼしく、女性関係もだらしく、晩年は相当の収入があったはずなのに借金まみれであった。幼い頃から晩年に至るまでヨーロッパ中を旅して就職運動に励んだがその成果は全く上がらなかった。35年という短い生涯に膨大な作品を書き上げ、そのどれもが傑作であったが、それに応じた評価は生前には得られなかった。最期は不慮の死を遂げ、無人墓地に葬られた。

それぞれがお互いをどう見ていたかであるが、以下はハイドン側の資料である。『彼との触れ合いはハイドン自身の均衡を失わせる危険があるほど、深くハイドンを揺さぶったのである。齢すでに五十の坂をこえたエステルハージ家の楽長が、いかにモーツァルトを愛し、理解し、彼のテクニックととりわけ彼の精神を、ある意味ではすでに円熟の境に達していた自己自身の固有の様式の中に統合することができたかは、まさに「音楽史における奇蹟の一つ」であり、ハイドンが受けた至高な試練である。ここで挫折したならば、大作曲家としての生涯は終わっていた——。奇蹟はハイドンとモーツァルトがそれぞれの本来の個性を譲り合ったのではなく、反対に認め合いながらがいかに養分をとりえたところにある。「モーツァルトは依然として繊細かつ複雑であったし、ハイドンは力強く直接的であった」のである。まさに彼らの気質が正反対でどこまでも融和できぬものであったればこそ、嫉妬や下心なしにおたがいを高めあうことができた。』（マルク・ヴィニヤル著、岩見至訳「ハイドン」）。二人の関係についてこれ以上書き足す必要を感じない。

この二人の生前と現在での人気の違いを考えてみよう。現在はモーツァルトの方がハイドンに比べはるかに人気が高いようである。生前とは正反対である。この理由はなんであろうか。私はモーツァルトやハイドンを主に演奏するようになって以来、ずっとその理由を考えているのだがいまだ明解な答えを見いだせていない。

モーツァルトは「一を聞いて十を知る」タイプの天才である。彼の作品の多くは他の作曲家の作品をまねたり盗んだりして作られていると言って過言でないと思う。本家本元よりはるかに見事に仕上げてしまうのだから誰も文句は付けられない。だが真似をしたり盗んだりする相手が群小の作曲家であるうちはまだいい。相手が自分と同じくらいかそれ以上の場合は問題である。「自己の均衡を失わせる危険」が大きい。しかしモーツァルトは他者からの刺激がないと創作ができないのである。どんな大きな相手でもその様式を「自己自身の固有の様式の中に統合」せずにはおれないというのは彼の宿命である。モーツァルトは当時の、そしてそれ以前の諸様式を統合して洗練しまとめあげるタイプの天才である。他人の様式をまねたからといって独創性がないわけではない。そのまとめ方が独創的なのである。

ハイドンは我が道を行く作曲家であり、他人の影響を安易に受け入れるタイプではない。時間をかけてこつこつと自分のやり方を工夫して編み出していく。モーツァルトが器用だとするとハイドンは不器用そのものである。だからハイドンの作風は素朴だが確固としており、強靱である。ハイドンはそのようにして音楽を作り、常に個性的、独創的であろうとしたため、現在の感覚では一見わかりにくいが斬新な作品を生み出した。生前のハイドンの人気はそのような魅力が貴族社会から市民社会に変わりつつあった当時の世相に合ったのであろう。

以下のことは以前にこの欄に書いたのだが、私はハイドンとモーツァルトの比較演奏という意味で忘れられない体験がある。オーストリア・ハンガリー・ハイドン管弦楽団の日本公演で、プログラムはオール・ハイドンであった。すべての演奏が終わってアンコールが演奏され、それがモーツァルトの「フィガロの結婚」序曲だったのである。その出だしを聴いた途端、強烈な違和感が私を襲った。あの聴き慣れ演奏し慣れて熟知しているはずの曲が、非常にゴテゴテしたいやらしい音楽に聴こえたのである。ああ、そうか、18世紀の人たちはハイドンとモーツァルトをこのように聴いたのだ。ハイドンがまともな、実のある音楽で、モーツァルトはそれとは全く違う虚飾に満ちた音楽と見なされたのだ。

◆モーツァルト: 歌劇《救われたベトゥーリア》序曲

1771年、第1回イタリア旅行の際、当地の貴族の依頼で作曲されたモーツァルト15歳の作品。2幕からなる宗教劇であるが、通常3幕からなるオペラ・セリアと同様とみなされる。題材は旧約聖書の「ユディット書」としてよく知られた物語で、アッシリアの王ネブカドネザルの軍に包囲されたユダヤの町ベトゥーリアの女傑ジュディッタ(ユディット)が、単身敵地に乗り込んで敵将の首を持ち帰るといものである。神童モーツァルト15歳の傑作オペラであり、モーツァルト室内管弦楽団は2003年、オペラ全曲の関西初演を行い、CD化も行っている。序曲は二短調で、短い急―緩―急からなる3楽章形式を取っている。音楽は大変激しいもので、同時期にハイドンが集中して作曲した一連の「シェトルム・ウント・ドランク(疾風怒濤)様式」の短調交響曲の影響が考えられる。

◆モーツァルト: ピアノ協奏曲 第20番 二短調

モーツァルトのピアノ協奏曲第19番と第20番の間には、ベートーヴェンの交響曲における第2番と第3番の間にもたとえられる大きな飛躍がある。突如としてそれまでとは別人のような作風が出現するのだ。この曲は後のショパンやシューマンに直接つながるロマン派のピアノ協奏曲の原型といえよう。ベートーヴェンが愛好してカデンツァを作曲したことはよく知られており、現在この曲のカデンツァはほとんどベートーヴェンのものが演奏されるようだ。

◆モーツァルト: オッフェルトリウム《ミゼリコルディアス・ドミニ》(「主のお恵みを」) 二短調

オッフェルトリウムとは「奉納唱」という、ミサの構成要素のひとつである。この作品は1775年、ミュンヘン宮廷の依頼で作曲された。若い時期のポリフォニー(多声音楽)作品として自信作であったらしく、5年前の第1回イタリア旅行で教えを受けたジャンバティスタ・マルティーニに楽譜を送って批評を乞うている。短い曲であるが、ベートーヴェンの第9交響曲終楽章の「歓喜の歌」にそっくりなメロディが繰り返し出てくるのがおもしろい。

◆モーツァルト: キリエ 二短調

1781年、モーツァルト最初の大作オペラ《イドメネオ》K.366がミュンヘンで初演された。そのオペラの依頼主であるパイエルン選帝侯に、宗教曲の分野における自らの力量を示そうと作曲されたとされる。オーケストラ編成はクラリネット2本、ホルン4本を含む完全2管編成という、《イドメネオ》のものと全く同じでモーツァルトとしてはその後例を見ない大編成である。最近の学説ではこの曲の作曲時期をもっと後のウィーン時代としているようだが、この曲にはウィーン時代の特徴であるポリフォニーの要素が全くと言っていいほどないので無理があると思える。ウィーン時代のモーツァルトは、パトロン

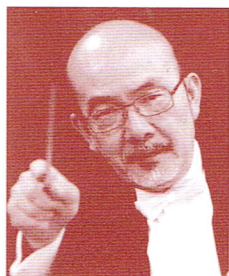
の一人であった外交官のシュヴィーテン男爵からそのコレクションであるバッハやヘンデルの楽譜の提供を受け、バロック音楽のポリフォニー様式を学んでいた。その成果はウィーン移住直後の作品である《ハ短調大ミサ》や最後の作品《レクイエム》に明らかである。

◆ハイドン: 《ネルソン・ミサ》二短調

ハイドンは生涯の終わり近く、《天地創造》(1797~98年)と《四季》(1799~1801年)という彼の最高傑作と言える2大オラトリオを作曲したが、その前後になんと6曲ものミサを書いているのである。彼が30年にわたって仕えたニコラウス・エステルハージ侯爵は1790年に亡くなっていたが、ハイドンはその後も侯爵家の楽長職にとどまり、ミサはいずれもその職務として作曲された。このミサは1798年(ハイドン66歳)の作で、Missa in angustiis(不安の時代のミサ)と名付けられたが、これは当時ナポレオン軍が間近に迫った状況を表している。ハイドンがこのミサを作曲中、イギリスのネルソン提督がエジプト沖でナポレオンの艦隊を破ったという報が入り、この曲はそれ以後《ネルソン・ミサ》と呼ばれるようになった。1800年にどういわけか、ネルソン提督はハイドンの任地であるハンガリーのアイゼンシュタットを訪れ、このミサの演奏を聴いたという。(ハイドンの最晩年1809年に結局ウィーンはナポレオンに占領される。その折フランス軍の音楽愛好家の将校がハイドンを訪ねるといことがあった)。作曲に着手した当時、侯爵家の楽団には管楽器奏者が一人もおらず、そのためオーケストラ編成は弦楽合奏、トランペット、ティンパニとオルガンとなったが、その後管楽器奏者が雇われたので管楽器パートがオルガンの代わりとして追加されている(本日はこの方の版が使用される)。二短調の部分は最初のキリエと後半のベネディクトゥスのみで、他の楽章はみな長調であるところがいかにもハイドンらしい。ベネディクトゥスの中に壮大なファンファーレがあるが、これがネルソンの勝利を表現していると思われる。

[参考文献]

- * この文章を筆者はどこかで読んだのだが思い出せない。ハイドンの伝記作者の一人の言だと思ふ。この稿を書くにあたり手元の文献を調べたが見つけられなかった。この文章が記載されている文献、あるいはそれが引用されている文献をご存じの方がおられたらぜひ筆者までお知らせいただきたい。
- ・マルク・ヴィニヤル著、岩見至訳「ハイドン」音楽之友社、1971年)
- ・アルフレート・アインシュタイン著、浅井真男訳「モーツァルト―その人間と作品―」(白水社、1961年)
- ・海老澤敏、吉田泰輔監修「モーツァルト事典」(東京書籍、1991年)
- ・大宮真琴著「ハイドン 新版」(音楽之友社、1981年)



門 良一●指揮 Ryoichi Kado, Dirigent

1939年大阪生まれ。フルートを曾根亮一氏に、指揮法を青山政雄氏に師事。1962年京都大学理学部卒業、67年同大学院修了。70年同志とともにモーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり現在に至る。87年モーツァルトのピアノ協奏曲全27曲、交響曲全74曲の連続演奏完結に対し、モーツァルト室内管弦楽団とともに第5回藤堂音楽賞を受賞。1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。

岡田佳子●ピアノ Yoshiko Okada, Piano

15歳で渡仏。パリ・エコール・ノルマル音楽院を経て、ロンドンでマリア・クルチョ、スイスでニキータ・マガロフ、バルセロナでアリシア・デ・ラローチャの諸氏に師事。83年大阪でのデビューリサイタルを皮切りに国内外で演奏活動を始める。91年3月からワルシャワ・チェンバーオーケストラ等とアメリカ、カナダ、ヨーロッパ各地での演奏ツアーの他、各地の音楽祭に出演。91年11月にはカーネギー大ホールでのリサイタルで成功を収め、その後も93、96、97年同ホールでの演奏会は超満員の盛況を続けた。95年夏、第1回OKADAフェスティバルをポーランドのザコパネで開催。以後毎年各地でフェスティバルを続けている。また大阪でのリサイタルをはじめ、夫であるフルーティスト、グレゴリー・チモシュコとのデュオコンサートを東京、大阪、ニューヨーク、ワルシャワ等で開催するなど積極的な演奏活動を展開している。現在、ブリュッセルに在住し、政府公認の「モーツァルト音楽院」を開設し後進の指導にも力を注いでいる。近年はウィーンにてパウル・バドゥラ＝スコダ氏のもとでモーツァルトの研究を続けている。CD録音も数多く、ワルシャワ・チェンバーオーケストラ、アマデウス・チェンバー、ポーランド国立放送交響楽団とのモーツァルトのピアノ協奏曲シリーズ5枚がポニーキャニオンから、その他、フランス・アルバム、モーツァルトのソナタ集、OKADAフェスティバル「ブリュッセル2003」のライブ録音、近年はウィーンのグラモラよりモーツァルト、ベートーヴェンのピアノ曲集が発売されている。



木村 能里子●ソプラノ

武庫川女子大学音楽学部在学中、ドレスデン国立歌劇場オペラスタジオのオーディションに合格、5年契約を結ぶ。その後も同歌劇場及びヴァイマル国民劇場のソリストとして正団員契約を結び活躍。古楽アンサンブルのソリストとしてもオーストリア放送やバイエルン放送に出演。又、ストラヴィンスキー、シュールホフのオーケストラ歌曲をCD録音。オーケストラとの共演も数多く、ヴァイマルを拠点に活動。ヴァイマル・リスト音楽大学講師。



山田 愛子●アルト

神戸女学院大学音楽学部卒業、同大学大学院音楽研究科修了。第12回松方ホール音楽賞、第79回日本音楽コンクール入選、第49回なにわ芸術祭新進音楽家競演会新人奨励賞、第58回全日本学生音楽コンクール大阪大会大学・一般の部第3位等を受賞。関西二期会オペラ公演『ナクソス島のアリアドネ』ドリアーデ役でオペラデビュー。第九やオラトリオ等のソリストとしても活躍。関西二期会会員、神戸市混声合唱団団員、神戸女学院大学非常勤講師。



西垣 俊朗●テノール

大阪音楽大学大学院修了。在学中より宗教曲に手を染め、特にバッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」等のエヴァンゲリストとして高く評価されている。また、ロッシーニやモーツァルトのオペラも得意とし、モーツァルト五大オペラ（魔笛、ドンジョヴァンニ、コジ・ファン・トゥッテ、フィガロの結婚、後宮よりの逃走）全てに主演。関西二期会と大阪音楽大学オペラハウスのこのシリーズで好演している。大阪音楽大学講師。関西二期会理事、兵庫県活動推進委員会、神戸市音楽家協会会員。



萩原 寛明●バス

京都市立芸術大学大学院修士課程修了。ウィーン国立音楽大学卒業。関西二期会「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロールをはじめ、数多くのオペラに出演する他、新国立劇場地域招聘公演「ナクソス島のアリアドネ」の音楽教師役で好評を博す。第九やオラトリオ等のソリストとしても活躍し、著名指揮者やオーケストラとの共演も数多い。現在、神戸女学院大学、兵庫県立西宮高等学校音楽科各講師。関西二期会、日本シェーベルト協会、西宮音楽協会各会員。



モーツァルト室内管弦楽団／指揮：門 良一 *Mozart-Kammerorchester Japan / Ryoichi Kado, Dirigent*

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、40数年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シブリアン・カツリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シティオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を、また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開催している。

●メンバー コンサートマスター 釋 伸司

第1ヴァイオリン	釋 伸司	本多 智子	谷口 朋子	北村 奈美	松本 紗希	大西 秀朋	森住 憲一
第2ヴァイオリン	中川 敦史	増永 花恵	川島多美子	田原口安代	幣 晴代	清水のぞみ	
ヴィオラ	道幸 明美	三上 哲	灘儀 育子	高野ちか子			
チェロ	田中 次郎	南口 真耶	三宅 香織	尾崎 達哉			
コントラバス	林 俊武	北田 由美	土屋 綾子				
フルート	大江 浩志	本庄ちひろ					
オーボエ	上品 絢香	伊藤 祥子					
クラリネット	高橋 博	門 小夜子					
ファゴット	佐伯 利之	倉永 晴美					
ホルン	佐藤 明美	垣本奈緒子	西 陽子	小坂 智美			
トランペット	大西 由起	森下 智稔	滝村 洋子				
打楽器	泉 純太郎						

Profile

モーツァルト記念合唱団 ● 合唱 *Mozart Choral Ensemble*

1991年にモーツァルト室内管弦楽団の要請を受け特別編成された合唱団。女声は若手プロを中心に、男声は合唱王国関西の著名合唱団の指揮者、パートリーダーに参加を要請、1991年7月に益子務氏の指揮のもと発足、同年12月モーツァルト没後200年を記念してモーツァルト室内管弦楽団第48回定期演奏会で「レクイエム」を協演後、毎年協演を重ねる。93年初の単独自主公演でジャーニース・ワグナー氏を客演指揮者に迎え、「ロジェ・ワグナー・メモリアルコンサート」を開催。98、2000年ベルギー・フランドル政府の招きで文化交流使節として2度にわたりベルギー演奏旅行を行い、ブリュッセルのサン・ミッシェル大聖堂での演奏、FM-3での放送などで大成功を収めた。2000年設立10周年記念にCD「ロシーニ小荘厳ミサ」をリリース。2010年には神戸で行われた日本音楽療法学会での大会長公演、2011年モーツァルト室内管弦楽団との合唱団創立20周年記念コンサートに引き続き、2012年には合唱団の自主公演として20年の歩みを記念したコンサートをいずみホールで開催。

●メンバー

ソプラノ	川濱知永子	古結 洋子	酒井志奈子	島谷 陽子	銭田 美幸	谷本 雅美	友金 郁子
	中田 佳代	野口 歩	平芳真寿美	松井ひとみ	御池あゆみ	山本 真紀	
アルト	以倉安希子	井村 園子	原 由実子	大矢喜久子	佐野 康子	田中 薫	外山 有香
	中口真由美	中根 佳江	林 理恵				
テノール	岡本 弘信	桑田 明和	桑名 孝汰	近藤 達夫	陶山 悟嗣	辻幸 二郎	原井 翔平
	古川 完	吉田 均					
バス	小島 博	杉野 文昂	二階堂哲雄	野村 透	長谷川良隆	秦 大 林	龍太郎
	ピーター・フィンケ	米岡 実	渡邊 守				
練習ピアニスト	植松さやか						



益子 務 ● 合唱指揮 *Tsutomu Masuko / Chor-Dirigent*

1965年に京都大学卒業後、同大学院に進む。インディアナ州立ボールステイト大学院で声楽修士号、同大学院博士課程修了。武庫川女子大学音楽学部にて31年間勤め、学生及び後進の指導にあたる。2009年3月同大学教授を退任。その間、芸術学、音楽心理学、教育学の分野の研究に取り組み、研究テーマには「オペラ演出における現代性の研究」「重度障害者に対する音楽療法評価方法」などがある。著書「音楽療法と行動変容 その音楽的要素の検討」(1995)。

◆ 第162回定期演奏会〈創立45周年シリーズ〉第1回 2015年1月11日(日)午後2時 いずみホール

〈フランス音楽特集〉室内オーケストラによるベルリオーズ第2弾!

アダマン: 歌劇《われもし王者なりせば》序曲

ラヴェル: ピアノ協奏曲

ベルリオーズ: ヴィオラ独奏付き交響曲《イタリアのハロルド》

ピアノ: 山田富士子

ヴィオラ: 店村真積(元讀響・N響首席、現京響首席)

指揮/門 良一

◆ 第163回定期演奏会〈創立45周年シリーズ〉第2回 〈モーツァルトの室内楽ディヴェルティメント名曲集〉

2015年3月7日(土)午後2時 天満教会

モーツァルト: ディヴェルティメント 変ロ長調 K.137

モーツァルト: 音楽の冗談 ヘ長調 K.522

モーツァルト: ディヴェルティメント「第17番」ニ長調 K.334

ヴァイオリン: 釋 伸司、中川 敦史 ヴィオラ: 佐份利祐子

チェロ: 日野 俊介 コントラバス: 南出 信一

ホルン: 佐藤 明美、垣本奈緒子 お話: 門 良一

◆ 第164回定期演奏会〈創立45周年シリーズ〉第3回 2015年5月10日(日)午後2時 いずみホール

〈ベートーヴェン・シリーズ〉第5回

ベートーヴェン: 交響曲 第1番 ハ長調 Op.21

ベートーヴェン: ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 Op.19

ベートーヴェン: 交響曲 第7番 イ長調 Op.92

ピアノ: 上野 真

コンサートマスター: 釋 伸司 指揮: 門 良一

◆ 第165回定期演奏会〈創立45周年シリーズ〉第4回 2015年7月19日(日)午後2時 いずみホール

〈モーツァルトとハイドン〉その9

モーツァルト: 交響曲 第36番 ハ長調 K.425 《リンツ》

モーツァルト: ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲

変ホ長調 K.064

ハイドン: 交響曲 第88番 ト長調 Hob.I-88

ヴァイオリン: 馬淵 清香 ヴィオラ: 馬淵 昌子

コンサートマスター: 釋 伸司 指揮: 門 良一

